
オーストラリアと日本の 子どもたちをつなぐ テレコラボレーションプロジェクト (USING TELECOLLABORATION TO CONNECT AUSTRALIAN AND JAPANESE CHILDREN: A CASE STUDY)

SHINJI OKUMURA (奥村 真司)
Mukogawa Women's University (Hyogo)

MASAE UEKUSA (植草 雅絵)
Tecoma Primary School (Vic)

ABSTRACT

The purpose of this paper is to report an attempt of asynchronous telecollaboration amongst Japanese and Australian primary school students. Using an educational social networking site (SNS), students introduced typical cultural events from their own countries in written language. Observing students' engagement and reviewing their reflections, it was acknowledged that exchanging cultural information on the SNS became an authentic and meaningful opportunity in learning foreign languages (FLs). Moreover, the telecollaboration project enabled many students to enhance their motivation in learning FLs and understanding different cultures. Conclusively, telecollaboration amongst primary school students can be significant for enhancing FL learning and triggering intercultural understanding (IU), and thus, a telecollaboration project beyond borders is recommended for FL education for young learners.

はじめに

これからの小学校外国語教育においては、コンピューターやタブレットなどの情報通信技術 (Information Communication Technology: ICT) 機器のさらなる拡充が期待される。とりわけ、Web 2.0 テクノロジーに着目すると、Facebook、Twitter などに代表されるソーシャルネットワークサービス (Social Network Service: SNS) は、国や地域の境界を越えたオンライン上での人々のつながりを容易にしている。言語教育の現場においても、SNS を活用したオンラインコミュニケーションは、当該目標言語を使用または学習する相手に対して実際に使用するというオーセンティックな言語活用の機会を提供するものとなる。また、その活動に文化理解的要素を取り込み、学習者同士が協働的学びを行うことによって、異文化理解向上の機会となる。このようなオンライン上での協働的学びは、「テレコラボレーション」と位置づけられている。Belz (2003: 2) は、テレコラボレーションを「外国語学習と異文化理解のために、言語文化教育のエキスパート (例えば教師) による指導のもとに体系化された電子媒体による異文化間コミュニケーション」とであると定義づけている。

言語教育におけるテレコラボレーションの有効性は、さまざまな研究者によって述べられている。言語教育に関して、例えば Barrs (2012) は、テレコラボレーションは、教室外で目標言語の話者と継続的につながることのできる便利で有効な場となると主張している。また、Pinkman (2005) は、実在の相手が存在する SNS にメッセージやコメントを書くという活動は、意味のあるオーセンティックなライティング活動であると述べている。異文化理解については、曹 (2006) は、日韓の小学生を対象としたテレコラボレーションの活動が、双方の児童が相手の国の文化を理解することの促進につながったと述べている。

本稿では、現在の外国語教育における ICT 活用の重要性と外国との積極的な相互交流の機会の有効性に鑑み、試験的に導入した小学校外国語教育におけるテレコラボレーションプロジェクトの概要、成果ならびに課題を報告する。

背景

ビクトリア州では、政府の方針として言語教育とICT活用の連携を推進している。具体的には、ビクトリア州の教育課程であるビクトリアン・カリキュラム (Victorian Curriculum) において、ICT は言語教育を推進する強力な道具であると述べている (Victorian Curriculum and Assessment Authority 2018)。また、Victorian Curriculum and Assessment Authority (2018) は、ICT を活用したコミュニケーションという側面について、ブログ、SNS やバーチャルクラスルームなどのデジタル教材を活用したオンラインコラボレーションを推奨している。さらには、このような ICT の活用によって、ビクトリア州の子どもたちが、国境を越えた他の国や地域の子どもたちとつながり、オーセンティックな言語使用と異文化理解の貴重な体験ができると期待している。

日本語教育実践に焦点を当てた場合、日本とのつながりについて意識することも肝要である。オーストラリアの日本語教育においては、日本語母語話者との接触場面が極めて少ないことから日本とのつながりを実感しにくく、日本語教師はさまざまな工夫をしている。その一つに、ICT を積極的に活用したネイティブ・スピーカーとの交流促進が挙げられる。例えば、ビクトリア州のいくつかの小学校では、日本の公立小学校とビデオ会議システムを活用した交流活動を行っている (奥村 2016)。ビクトリア州では、教育政策および現場での実践において、ICTの活用は外国語学習と密接につながっており、今後もますます拡充される領域であるといえる。

日本においても、文部科学省が、2014年に「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」（文部科学省2014）を公表し、英語を最優先外国語とした言語教育政策を推進している。とりわけ、2020年全面実施の新学習指導要領では、英語教育の開始が中学年（第3、4学年）に引き下げられ、「外国語活動」として音声重視の活動が行われる。また、新規に導入される高学年（第5、6学年）のための教科「外国語」では、「読む」、「書く」を加えた4技能を扱う。文部科学省は、小学校英語教育の充実に向けて、ICTを活用した情報通信ネットワーク等を通じた国内外の様々な学校との交流を推奨している（文部科学省 2016）。

両国の小学校外国語教育における ICT の活用の推進に鑑みれば、日本語と英語を媒介とするテレコラボレーションは、日本語学習者および英語学習者の双方にとって、オーセンティックな言語活動を提供する貴重な機会となりえるであろう。また、このような機会がさまざまな学校に広がることによって、オーストラリアと日本間の相互尊重、相互理解にもつながると考える。

テレコラボレーションプロジェクトの概要

意義

小学校の外国語学習におけるプロジェクト学習型テレコラボレーションの活動事例はまだ少ない。したがって、異文化理解としての小学校間テレコラボレーションを計画し実行すること、またその効果および課題を検証することは、ICTを活用した小学校の外国語教育における世界とのつながりの発展に寄与すると考える。

参加者

本プロジェクトへの参加児童は、オーストラリア側は、ビクトリア州の公立小学校の 5、6 学年 3 クラスの 70 名であった。すべてが初級日本語学習者であり、事前のアンケート調査によると、学外（課外）においても日本語を学んでいる熱心な児童は、わずか 6% で、31% の児童にとっては異なる言語や文化に触れる機会は学校のみであった。日本側は、東京都の公立小学校の 6 学年 1 クラス、初級英語学習者の 32 名であった。事前アンケート調査では、43% の児童が課外でも英語を学習しており、56% が外国人と英語で接触する機会を持っていた。指導者として、日本の小学校は学級担任 1 名、オーストラリアの小学校は、日本人の日本語専科教師 1 名が参加した。

使用サイト

本プロジェクトでは、教育用 SNS である Edmodo (www.edmodo.com) を使用した。Edmodo は、2008 年に米国で開発された無料の教育用サイトで、英語だけでなく日本語を含めた複数の言語をサポートしている。Edmodo は主に、幼稚園から高校までの児童・生徒を対象とし、学習者、教師、保護者がともに学習を推進、管理するための機能が盛り込まれている。Edmodo では、個人の学習や管理だけでなく、グループ学習も行うことができる。グループの掲示板に文字を書き込むことができる他、写真や動画、また他のサイトのリンクを掲載することもできる。掲示板では、相手の投稿に直接コメントするのみでなく、「いいね」（英語版では、'like'）の機能を使って、相手の投稿に対して、面白い、気に入ったなどの感情を表すことができる。

また、グループコードを共有することによって、様々な国や地域の学校の児童生徒がオンライン学習コミュニティを形成し、交流できるようになる。

本プロジェクトにおける Edmodo の使用理由は、登録した教師および児童のみでの活動ができる安全性と、ビクトリア州の小学校で、すでに、さまざまな教科の授業において、Edmodo を活用していることである。



図1 Edmodo のインターフェイス (サンプル)

準備段階

外国語教育における ICT 活用の重要性と海外との積極的な交流機会の模索に鑑み、日本での小学校教員経験があり、現在日本およびオーストラリアの小学校外国語教育の研究を行っている言語教育研究者（筆者）が、自分自身の大学の英語教育でのテレコラボレーションの実践経験をもとに、小学校外国語教育におけるテレコラボレーションの可能性を模索すべく、プロジェクトを立ち上げた。このプロジェクトには、私的教育機関のスタッフおよび Edmodo 社のスタッフも参加し、チームによってはじめに原案が作成された。原案では、児童の外国語学習に対する負担を考慮し、児童が好きなもの、好きなことなどを目標言語で紹介しあう活動を取り入れた。

その後、言語教育研究者が知っている日本とオーストラリアの小学校各 1 校に計画を打診し、プロジェクト実施について両校の学校長の許可を得た。その際、日本の小学校には、Edmodo について、その安全性や機能を説明し、Edmodo を使用することへの了解も得た。

プロジェクトが正式に各学校によって認可された後、このプロジェクトを担当することになった教員にプロジェクトの原案を提示し理解を求めたが、日本の小学校の校長並びに担当教員から、日本の小学校学習指導要領の内容を踏まえ、社会科との連携を図った文化紹介の活動を行いたいとの希望があり、オーストラリアの日本語教師の同意を得て、文化紹介を扱うテレコラボレーションを行うこととなった。

活動時間および内容の設定については、各小学校のカリキュラムを考慮し、各学校の担当教員にとって過度な負担を与えることのないようにし、プロジェクトチームと各教師が連携し意見交換をしながら、具体的な内容や必要となる教材等を決定していった。

到達目標

児童の到達目標としては、テレコラボレーションによる国際交流活動において、文化紹介の活動を通して、オーストラリアと日本の児童が、異文化理解能力と目標言語学習への意欲を高めることである。

実践

すべての準備が整った 2017年11月から12月の2か月間に本プロジェクトは実践された。活動の内容は、表1が示す通りである。

	活動内容
事前活動	事前アンケートに回答をする。
1時間目	Edmodo の使い方を知る。(日本の児童のみ)
2時間目	個人学習として「自分の国らしいと思う行事」を調べ、小グループで共有する。
3時間目	小グループで行事を1つ選択し、それぞれの目標言語2、3文と画像・絵を盛り込んだ各々の文化を紹介する資料を作成し、掲示板に投稿する。
4時間目	相手の投稿を閲覧し、相手の国の行事について学習し、理解を深める。
事後活動	事後アンケートに回答する。

表1 プロジェクトの活動内容

本プロジェクトは、両校児童の外国語学習および異文化理解に関する実態を把握するために、事前アンケートを両校で行った。アンケートには、「日本語（英語）の学習は好きか」、「外国の文化に興味があるか」、「学校以外で、日本語（英語）を学習する機会はあるか」、「学校以外で日本語（英語）を話す機会はあるか」などの質問を盛り込み、児童の外国語学習への興味・関心と学校外での外国語学習および異文化体験の有無について調査した。アンケートの質問項目は、日本語、英語ともに同内容とした。

前述の通り、プロジェクトに参加したビクトリア州の小学校では、すでに、さまざまな教科の授業において Edmodo を活用しており、児童はその使用に慣れていていた。一方、日本の小学校では、SNS 自体使用している児童が少なく、SNS への投稿の仕方、写真等のアップロードの仕方など基本的な操作への理解が必要であったことから、1時間目に Edmodo の使い方について学ぶ時間を設定した。

2時間目では、はじめに双方の教師が、交流相手の国の児童に自国の文化を紹介するという本プロジェクトの活動の目的を説明し、どのようなものが自国らしい文化であり、何を相手の国の児童に紹介するかをグループで話し合い決めてもらった。その後、決定した内容をどのように説明するか、それぞれの第1言語で考えた。

3時間目では、児童が2時間目で考えた文化の内容を目標言語に変換するとともに、Edmodo 上で紹介するための資料を作成した。オーストラリアの児童は、普段の授業でコンピューターを使用する頻度が高くパワーポイントの使用になれているため、資料作成のためにパワーポイントを使用した。文化紹介の題材として、オーストラリア特有の文化といえる「オーストラリア・デー」¹ や「オーストラリアン・ルールズ・フットボール」²、またオーストラリアだけでなく一般的な西洋文化である「ハロウィン」、「クリスマス」、「イースター」も取り上げた(図2)。

日本の児童は、ワードプロセッサの使用に慣れていないため、画用紙を使用した手書きのものを作成した。文化紹介の英文を作成する際、児童の英語能力を考慮し、担任教師が英文作成のための資料を作成し、児童に提示した(図3参照)。紹介する文化としては、「正月」や「七五三」などに加えて、青森県の「ねぶた祭」など全国的に有名な祭を紹介するグループもあった(図4)。

投稿後、双方の児童は、相手の国の児童による投稿に対して「いいね」の機能を使って、相手の投稿に対して好意的な感情を示したり、「たのしそう」、「おもしろそう」などという簡単な日本語または英語でコメントをしたりした。

4時間目では、Edmodo の掲示板で相手国の児童が紹介した文化について、児童がグループで考えを共有し、文化紹介の伝え方の良かった点と相手国の文化の特色について意見をまとめ発表した。

全ての活動終了後、本プロジェクトを通した外国語学習および異文化理解に対する児童の意識の変容を探るため振り返りアンケートを両校で実施した。事後アンケートには、このプロジェクトを通して、「外国語学習にさらなる興味・関心を持ったか」、「自国文化にさらなる興味・関心を持ったか」、「外国文化にさらなる興味・関心を持ったか」などの質問を盛り込んだ。アンケートの質問項目は、事前アンケート同様、日本語、英語ともに同内容とした。



図2 オーストラリア人児童により作成された文化紹介の資料例

1 毎年1月26日にオーストラリアの人々が祝う国民の祝日であり、オーストラリアの建国記念の日にあたる。1788年1月26日にイギリス艦隊がシドニー・コープに到着した事に因んで定められた。

2 ラグビーを基にしてルールが定められたオーストラリア式のフットボールであり、オーストラリアでは、最も古い歴史を持つとともに最も人気がある。毎年9月には、9万人以上の観衆を集めるグランドファイナル(決勝戦)がメルボルンで行われる。

3文の英語で行事の説明をしよう！

①行事名を伝えよう。

Undo-kai is Sports day.

(運動会はスポーツの日です。)

・年越し(大晦日) Toshikoshi	新年の前日 New Years Eve
・正月 Oshogatu	新年の祝日 New Years holidays
・節分 Setsubun	冬の終わりの祝日 holiday for end of winter
・ひな祭り Hinamatsuri	女の子の日 Girl's Day celebration
・お花見 Ohanami	桜を見ること cherry blossom viewing
・端午 Tango	男の子の日 Boy's Day celebration
・七夕 Tanabata	星のお祭り the Star Festival
・夏祭り Natsumatsuri	夏のお祭り Summer Festival
・十五夜 Jugoya	満月のお祭り the night of the full moon

②いつ行われるか伝えよう。

We enjoy it in April.

(私たちはそれを4月に楽しみます。)

注意！
「月」の前には「in」
「日」の前には「on」が
くるよ！
例えば・・・
in April [4月]
on 1 April [4月1日]

ちなみに...	
1月 January	7月 July
2月 February	8月 August
3月 March	9月 September
4月 April	10月 October
5月 May	11月 November
6月 Jun	12月 December

※できる人は enjoy を変えて工夫してみよう！

③行事にまつわる文章を考えよう。

We eat _____.

(私たちは _____ を食べます。)

We wear _____.

(私たちは _____ を着ます。)

We throw _____.

(私たちは _____ を投げます。)

We view _____.

[see, look, watch]
(私たちは _____ を見ます。)

We dance _____.

(私たちは _____ を踊ります。)

We play _____.

(私たちは _____ で遊びます。)

We pray _____.

(私たちは _____ を祈ります。)

We write _____.

(私たちは _____ を書きます。)

図3 英文作成のための資料

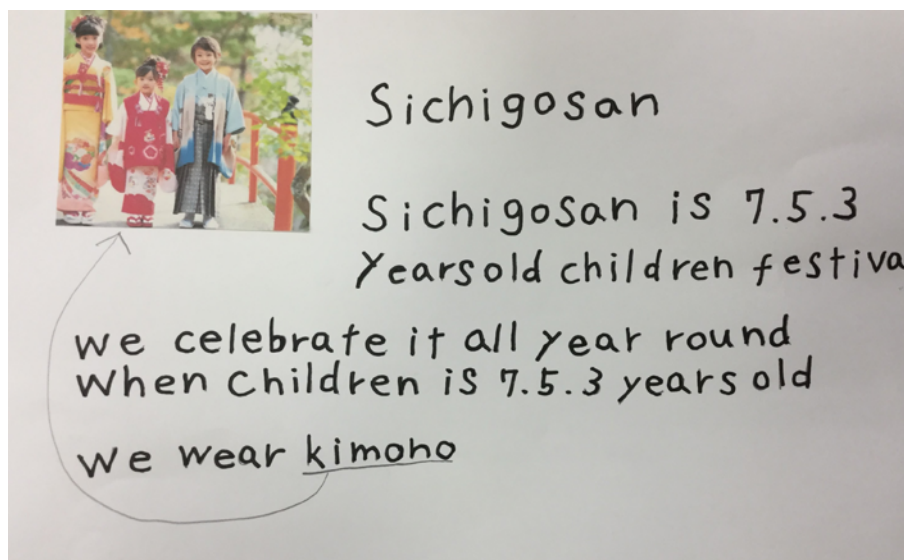


図4 日本人児童により作成された文化紹介の資料例

児童の反応

事後アンケートの結果から、双方の国の児童の多くは、今回のプロジェクトを楽しい経験と捉えていた。オーストラリア側では、外国にいる日本の子どもたちとインターネットを通して交流でき、外国人との新たなつながりを楽しいものと認識している児童が多くみられた。この点においては、本プロジェクトの到達目標はおおむね達成できたと考えている。この根拠となる児童によるコメント例を紹介する。なお、児童名は仮名である。

Emma: It's fun because we got to work in a group and see what Japanese kids do in English.

Justin: We get to share things with kids our age that live in a different place.

日本側では、英語学習や外国文化理解へのさらなる興味関心の高まりを示す児童が多くみられた。具体的なコメント例は以下の通りである。なお、名前は仮名を使用している。

さとし：エドモドをやって、もっと英語を話したいし、英語が分かったら、世界の見かたも変わるし、英語が楽しいともっと思える。
 ともこ：日本と全然違う文化とかもあれば、少し似ているものもあって、面白い。外国の文化はまだまだ知らないのがあり、もっと知りたいと思い、興味を持った。

一方、双方の児童の中には、外国語学習そのものに否定的な見方をするものもいたことも注視すべきである。具体的なコメントには次のようなものがあった。

Jeff: (I don't want to learn Japanese) because I won't use this language in the future.
 ゆうた：エドモドは楽しかったけど、英語は苦手だし、使いたいとは思わない。

成果と課題

テレコラボレーションを実践した双方の教師による振り返りから、本プロジェクトの成果と課題を述べる。

成果

オーストラリア側の成果の一つに、児童が、自分達の投稿に対して、日本人児童から「いいね」やコメントを受け取ることができ、タイムラグなく相手の反応を見ることができたことによって有意義な交流となったことが挙げられる。とりわけ、「いいね」の機能は、目標言語を書くことに慣れていない外国語学習初級者同士の交流でも、相手に自分の感情を示すことができる点において有効であったと考える。

また、教師は、活動の進捗状況を確認しながら、指導や計画を随時調整できたことから、SNS を活用したコミュニケーション活動を取り入れることによって、言語教育の柔軟性と利便性を高めることができるという可能性を認識した。

日本側の成果としては、振り返りアンケートの結果から、多くの児童が、外国語でのコミュニケーションの楽しさを感じることができたことがある。それは、通常の外国語活動の授業での日本人児童同士によるコミュニケーションとは異なる、外国人とのつながりを喜び活動する態度として観察された。さらには、外国人との実際のコミュニケーション活動体験が、英語学習へのさらなる興味関心へとつながり、プロジェクト終了後、児童がアルファベットを書く活動を空き時間等に自主的に取り組む様子が見られるようになった。このような日本人児童の変容は、英語を書くことへの意欲向上と認められる。

課題

一方、本プロジェクトには、双方の学校に共通する課題も見出された。その一つは、事前準備段階において教師による積極的な交流ができなかったことである。今回の実践では、現場教師の忙しさを理由に、計画についてはプロジェクトチーム主導で行い、内容の連絡調整については、チームの担当者が、それぞれの教師とやりとりをした。事前準備段階

から、教師同士が自己紹介を含めた交流を行いながら、プロジェクトについての意見交換やそれぞれの児童の実態等の情報交換ができればよかったと考えている。今回のプロジェクトの指導者がどちらも日本人であったことの利点を教師の相互交流、相互理解に活かすことができなかった。

プロジェクトにおける児童の活動は、文化紹介に特化した。児童による活発なコミュニケーションのためには、自己紹介などの児童に身近な内容を取り上げた活動内容が妥当であったと考える。文化紹介等は教科統合（今回の場合、外国語と社会科）の側面が強いが、教科統合に関連するトピックについては、語彙の難易度が上がってしまう場合がある。それぞれの外国語学習のレベルと児童の実態を考慮した上で、テレコラボレーションで扱うトピックやタスクを考える必要もある。

おわりに

本プロジェクトが示した通り、外国語学習におけるテレコラボレーションによる体験的な活動は、伝える相手が実在し、伝える内容が明確であることによって、言語や文化への関心意欲の高まり、そして目標言語と異文化理解能力の向上の大きなきっかけとなると考える。また、テレコラボレーションによって、世界の子どもたちがつながり、交流することは、外国語や文化に対する意欲や能力を高めるだけでなく、外国語学習のボーダーレス化を実感させてくれるのであろう。

参考文献

-
- 奥村真司 (2016) 「オーストラリアの外国語教育における日本とのつながり」日本比較教育学会第52回大会
-
- 曹圭福 (2006) 「日韓小学生間の E-mail 交流授業における異文化コミュニケーション 能力の分析」『日本教育工学会論文誌』2006 年 30 巻 1 号、59-67
-
- 文部科学省 (2014) 「今後の英語教育の改善・充実方策について 報告～グローバル化に対応した英語教育改革の五つの提言～」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/102/houkoku/attach/1352464.htm 2018 年5月15日参照
-
- 文部科学省 (2016) 「外国語教育における ICT の活用について (たたき台) (現状と今後の方向性)」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/058/siryo/_icsFiles/afieldfile/2016/05/25/1371098_5.pdf 2018年2月10日参照
-
- Barrs, K. 2012. Fostering Computer-mediated L2 Interaction Beyond the Classroom. *Language Learning & Technology*, 16 (1): 10-25.
-
- Belz, J. A. 2003. From the Special Issue Editor. *Language Learning & Technology* 7 (2): 2-5.
-
- O'Dowd, R. 2011. "Intercultural communicative competence through telecollaboration." In *The Routledge Handbook of Language and Intercultural Communication*, edited by J. Jackson, 342-358. Abingdon: Routledge.
-
- Pinkman, K. 2005. "Using Blogs in the Foreign Classroom: Encouraging Learner Independence." *The JALCALL Journal* 1 (1): 12-24.
-
- Victorian Curriculum and Assessment Authority (VCAA). 2018. *Victorian Curriculum*. Accessed 29 October, 2018.
<https://www.education.vic.gov.au/school/teachers/teachingresources/discipline/Pages/default.aspx>.